

榎本武揚と幕府海軍

塚越俊志

はじめに

榎本武揚は幕末から明治にかけて軍事・外交に関わった人物である。

榎本武揚に関する研究は、一戸隆次郎氏^①、加茂儀一氏^②、井黒弥太郎氏^③、榎本隆充・高成田亨両氏^④らによる伝記研究が中心である。そこで、本稿では、特に幕末の海軍創設に関する榎本武揚の動向を明らかにし、幕府海軍に果たした役割を明らかにしたい。

武揚の父田兵衛武規は伊能忠敬の内弟子であった。武揚は昌平坂学問所を丙合格で通過する。その後、江川塾に入門し、蘭文兵書や隊砲術、製鉄術を学び、江川塾にいた中浜万次郎から英語やアメリカの文化、国際情勢などを学んだ^⑤。

嘉永七年（一八五四）二月八日、目付堀利瀨の従者として北蝦夷の探索に随行している。なお、この探索には勘定吟味役村垣與三郎、徒目付平山謙二郎、平山従者会津藩士一瀬紀一郎（雑賀孫六郎）、武田斐三郎らが随行している。この記録は『入北記』にまとめられている。加茂儀一氏はこの時の榎本の体験を「国を守るには如何にすればよいか、いかにしてこの北方の重要な地を開拓していくか、その回答として、海軍を

興すこと、そして北方を開拓することが彼の使命のように感ぜられた」と記している。当該期の榎本の記録は乏しいため、榎本が本当はどのように感じていたのかはわからないが、この時の経験が後に榎本を北方に向けたことに間違いはないだろう。また、この縁もあって、武田が教授を務める諸術調所に榎本は通った。

このように、様々な技術を学んだり、実地見聞したりすることで、榎本は力をつけていったのである。

一 長崎海軍伝習所での榎本武揚

安政二年（一八五五）に長崎海軍伝習所に幕府第一期生が派遣され、長崎海軍伝習が始まった。蝦夷地見聞から帰って来たばかりの榎本は第一期生には間に合わなかった。そこで、安政三年に幕府が第二期生の募集を行なったため、榎本は応募した。しかし、彼の願書は却下され、応募から外れた。そのため、彼は昌平黉時代からの親友である大目付伊澤美作守政義の次男謹吾のついで、政義に頼み、謹吾が伝習生頭取として長崎に赴任するにあたり、特別許可を貰い、その同行を許されたとい

う。⁷⁾ 榎本は特別入学生であったが、第二期幕府留学生は総計一名にのぼる。

第二期生が伝習を行なう頃にはカリキュラムも整備され、日曜日は休課となったほか、第一期では、航海・運用・戦術に主眼が置かれた課目だったのに対し、二期生は実地のために蒸気器械湯釜、鎔鉄炉付属の蒸気機械類並びに鉄槌、銅鉄竿板製造機などをオランダから移入にして、カッターを作ったりしている。

当時の第二期生の伝習状況は「伝習場も見廻り候。西の書院に勝麟太郎初め一同袴計りにて出居り、中央には例のシッポク台を据置、(中略)蘭士其前にて、右板へ白粉墨にて図取をしながら、航海の事を説き、伝習輩は通詞蘭士の語を御国語にて直に申述候を、銘々筆記す。訓練は西の馬場にて次の士官指揮し、松平金之助、尾本久作など号令教導となりて修養致す。蘭船雛形三間計に出来居り、帆前等伝習太鼓をも打ち候」⁸⁾と、目付が幕府に伝えた。榎本もこのような伝習を受けていたということになる。

安政四年八月にオランダに注文した二隻の軍艦のうちヤッパン(Japan)が長崎に入港し、伝習生の訓練用に使用された。これが咸臨丸となる。勝はオランダ人の乗組員と共にこの艦に乗って五島、対馬、朝鮮近海を航海した。この実地訓練は第三期生の沢太郎左衛門が一〇月二十九日付の日記で、「一同ヤッパン御船に相越し、蒸気方はその焚方に懸り、運用方は甲板にて帆前の業を為す。(中略)運用並びに砲術も実地の業伝習あり」⁹⁾と記している。この船に提督として乗り込んだのが木村圖書頭喜毅、沢は運用及び砲術士官として、榎本は蒸気士官として乗り込

んでおり、榎本は蒸気機関学の伝習と実習を行ったことがうかがえる。

安政五年の大老井伊掃部頭直弼の条約調印以降も榎本は長崎で伝習に励んでいた。三月、勝を総督として観光丸(旧Soembing号)、は鹿兒島に向かい、安政の大獄前の薩摩藩の偵察を行なった。この船の機関方として榎本も乗船していた。¹⁰⁾ 榎本は薩摩藩の軍事工場(集成館)や訓練を参観したが、政治的な交渉に興味を示さなかった。

同五月にはオランダからエド(Edo)が長崎に到着し、朝陽丸と命名し、榎本は伝習生らとともに南海を航海し、江戸に行き着いて築地軍艦操練所を支援し、六月には軍艦操練所教授に任命された。¹¹⁾ 七月に日英修好通商条約を締結するにあたり、イギリスからエンペラー(Emperor)が贈られ、蟠龍と名付けられた。こうして軍艦操練所に咸臨丸、観光丸、朝陽丸、蟠龍丸の四隻がそろい、榎本が管理に当たった。¹²⁾ こうして海軍が充実するかと思った矢先、安政六年二月、長崎が江戸から遠く、外国人教師の経費の問題などから海軍伝習所は閉鎖に至った。

伝習所の教官カッテンディーケ(Willem Johan Cornelis ridder Huijsen van Kattendijke)は榎本を「例えば榎本釜次郎氏のごとき、その先祖は江戸において重い役割を演じていたような家柄の人が、二年來一介の水夫、鍛冶工および機関部員として働いているというのがごときは、まさに当人の勝れたる品性と、絶大なる熱心を物語る証左である」¹³⁾と評価している。更に、カッテンディーケは榎本を「純真にして、快活」¹⁴⁾「企画的な人物」¹⁴⁾であると述べている。このような彼の個性が榎本を成長させたのである。

二 オランダ留学

安政七年、幕府は日米修好通商条約批准・交換のため正使新見豊前守正興らをアメリカに派遣し、咸臨丸が随行した。井伊亡き後、老中久世大和守広周と同安藤対馬守信行らはアメリカと交渉し、海軍の拡充を目指した。

文久元年（一八六一）十一月、榎本らのアメリカ留学が決定された。しかし、アメリカでは南北戦争が勃発し、アメリカ政府は幕府からの軍艦の注文と留学生派遣を断ってきた。そこで老中久世大和守広周と安藤対馬守信行は文久二年三月二日、「新ニフレカト三百五拾馬力之蒸氣軍艦壹艘、於貴國被打立度、（中略）船形器械等方今發明之新式を以造船有之様いたし度、将又航海之術隆盛ならしめんか為、右フレカトフリゲート蒸氣軍艦一隻の建造を注文するとともに、留学生の派遣も決めた。文久の改革にともない、長崎病院詰の伊東玄伯と林研海を加え、オランダ留学生が決定した。メンバーは次の通り。¹⁶⁾

船具、運用、砲術。留学生取締	内田恒次郎
同右及機関学	榎本釜次郎
同右及銃砲並火薬製造法	沢太郎左衛門
同右及造船学	赤松大三郎
同右及測量学	田口俊平
法律（国際法、財政学、統計学）	津田真一郎
同右	西周助

ほかに、製造中実地諸術研究のために水夫頭古川庄八、上等水夫山下岩吉、鋳物師中島兼吉、時計師大野弥三郎、船大工職上田寅吉、宮大工職久保田伊三郎、鍛冶職大川喜太郎が追加された。赤松は開成所頭取古賀謹一郎が遣米使節団の経験から推薦し、田口は老中久世の家臣であったことが選抜の理由となっている。¹⁷⁾

一行のうち伊東と林は長崎から乗り込むことになっていたのが、最初総勢一四名は、文久二年六月一日、咸臨丸で品川沖を出帆したが、関東地方に麻疹が流行していて、沢、内田、榎本、赤松の四名が感染し、伊豆下田で療養し全快を待って八月二日に改めて出港し、二三日によりやく長崎に到着した。その間に宮大工職久保田が肺結核となったため、彼の留学を取りやめにし長崎で降ろした。長崎で伊東と林が加わり、総勢一五名で九月一日、オランダ商船カリプス（Calypso）号で長崎を出発した。この船には船長ポールマン（G. Polman）、舵取り二名、大工一名、水夫六名、料理人、給仕一名、合計一二名が乗り組んでいた。彼らはまずオランダ領バタビアに向けて移動を開始した。

長崎を出、台湾や香港を過ぎ、一〇月六日にジャワの北東の海上で暴風雨にあい、暗礁に乗り上げてしまった。船長ポールマンと水夫はどこかへ逃れたようだが、日本人たちは取り残され、翌日、榎本らは海賊船を発見し、それに乗り込み、バンカ島という無人島へ上陸させた。¹⁸⁾ 同一日、土人たちが迎えに来てくれて、レパル島に向かった。酋長の歓迎を受け、彼らの働きによって、一八日、バタビア港に到着した。日本人たちは一四日船待ちをしなければならなかったため、内田と榎本は一行を代表してオランダ総督に謁見した。そして文久二年一月二日、オラ

ンダ客船テルナーテ (Ternate) 号 (艦長カルスト、Karst) でオランダを目指した。榎本武揚はこの日から航海日誌『渡蘭日記』を記している。この日記は、航海用語のみならず、普通に使用するオランダ語、英語、ドイツ語など数か国語で書かれているのが特徴的である。¹⁹⁾

オランダ貿易会社 (NHD) の代理人ボードウィン (Albertus Johannis Baudin) は家族に宛てた一八六三年二月七日付の書簡で、カリプス号の座礁のことを記し、十五人の日本人が「全員の生命が助かったのは何よりの幸いでした」²⁰⁾と安堵した上で、「一行の中には何人かの医師が含まれています。学問を修めた者として、日本に留まり国のために尽くすべきなのですが、彼らはまだまだ学ばなければならないことが一杯あるのです」²¹⁾と、留学生たちのことを気にかけている。

また榎本の日記は、バタビア港でテルナーテ号に乗船した一八六二年一月二二日 (文久二年一月二日) からセントヘレナ島寄港の前日にあたる一八六三年三月二五日 (文久三年二月七日) までの記録で、榎本が航海の途上で観察したものをありのままに書いている。その後、榎本がこの日記を破棄しようとしたところ沢が譲り受け保存したため、現在に伝わっている。

一八六二年一月二二日 (一月八日) 付の日記には、「ドクトル・エイセレンと話して十二時迄及ぶ、彼は三等の官醫にして年二十五なり、話究理學に及ふ」²²⁾とあり、榎本とエイセレン三等医師との間で光学論に及んでおり、榎本の興味がうかがえる。また、榎本は「NWTW」(北西徽北) という記号を用いて方向を記しており、天文学にも通じていたようである。

翌日、インド洋に入ろうとしたところで船がなかなか進まなかった。そこで、「アンクルリントン (引用者註―錨を上げること) ニ取掛ル。五時四十分抜錨、走る、七時錨を抛、深さ十尋餘」²³⁾といった具合に水深を測っている。

一八六三年一月一〇日 (一月二〇日) 付の日記には「偕東印度地方カカープ (引用者註―喜望峰) を廻りて欧羅巴に航するには、大凡羅針ノ方向をカカープノ方、西南西一線ニ乗りてカカープの付近を航するを益トス、(中略) 又欧羅巴々東印度ニ至るには喜望峯の沖を乗り、南緯高度の海路を航するを是とす」²⁴⁾と記している。榎本は喜望峰を東から廻る時と、西から廻る時の帆船の航海の仕方や、季節風と貿易風の吹く具合などについて船長から学んでいる。

一月二二日 (一月二二日)、榎本はサメを釣った。²⁵⁾ その二日後、「コロイス・ステル」(南十字星)²⁶⁾ を見ている。一月二五日 (二月六日) になって「強パッサートウキンド」(貿易風)²⁷⁾ が吹きたって、順調な船旅となった。一月三〇日 (二月二日) には、「前日殆ど水平上ニ見し所の十字星餘程地を出る高きを」²⁸⁾ と、南回帰線に近づく様子を記している。

二月七日 (二月九日) 付の日記で、「今夜甲必丹と話、和蘭商船の賃金の事に及ぶ、云く、當今船賃は一艘一ラスト (引用者註―積荷) 毎二百十ギルドデンより往事は百三十ギルドデンたりしと云々、(中略) 又同島にアールド・ラーリー (引用者註―石油) 出つると云、是は本邦越後の所謂クリーツの油と察するに同種なるべし」²⁹⁾ と記しており、貿易や産業に関する情報を入手している。

三月二二日 (二月三日)、セントヘレナ島について「ホスピタールを

設け、以て航海客の病患者ヲ療治スル由、故ニ海客此ニ來て病む者ある時は、直ニ登陸して病院ニ入りて治療を受け、而して別ニ藥禮ニ及ハすと云⁽³⁰⁾と、病院について興味を示している。

三月二五日(二月七日)、「正午の實測に據るに、船全く「シント、ヘレナ」嶋の附近ニあり、しかれ共更ニ島影ヲ見す、(中略)晚方鮮月在天、夕陽の餘照未散、殊紅中ニ嶋影屹立し、烈翁の事を想ひ出されて坐に懷古の情長し⁽³¹⁾」と記し、セントヘレナ島に到着する前日には島影が見えず慌てたようだが、榎本はセントヘレナ島が見えると、ナポレオン(Napoléon Bonaparte)に想いを馳せていることがうかがえる。日記はここで終わっている。

翌日、午前一時に、テルナーテ号はセントヘレナのジエームスタウン港に安着し、ストアス・ホテルに宿泊した。その翌日、榎本らはナポレオンの寓居のあったロングウッドを訪れ、その墓にも詣で、ナポレオンを偲んだ。榎本はこの時、次のような七言絶句の漢詩を詠んだ。⁽³²⁾

長林煙雨鎖孤栖 末路英雄意轉迷

今日弔來人不見 霸王樹畔列王鳴

とその感慨を表現した。

三月二九日(二月二一日)、再び乗船し、この島から離れ、北進し、北極星を見て、北半球に入った。その後、イギリス海峡に入り、四月三日(二月一六日)午後八時、オランダのプロウルス・ハーヘン碇泊場に投錨した。

オランダに到着すると、シーボルト(Philipp Franz Balthasar von Siebold)の『日本』編集に関わった東洋学者ホフマン(Johan Joseph

Hoffman)が対応し、ロッテルダムに向かった。ロッテルダムでは、かつて長崎海軍伝習所で教官をつとめたカッテンディーケが海軍大臣として一行を迎えた。更に、同じく伝習所で医師だった軍医ポンペ(Johannes Lijdius Catharinus Pompe van Meerdervoort)も一行に随行した。このように、日本のことをよく知っている人物たちが彼等を支援したのである。まず、津田と西は法律を学ぶため、ライデンで諸法律、万国公法、経済学を研究することとなり、古川以下六名の水夫や職人もホフマンからオランダ語を学ぶため、ライデンに残り、そのままライデンの航海学校に入学した。

その後、ハーグに移ったのは内田、榎本、沢、赤松、伊東、林及び田口の七名であった。機関専門の榎本はヘデンプテ・ブルグワル十八番地の器械方スコロイドル方⁽³³⁾へ下宿するようにカッテンディーケに命じられた。⁽³⁴⁾しかし、この町・この番地には催眠術師シュレーダー(Willem Schröder)が住んでいた。⁽³⁵⁾すなわち、榎本は催眠術師と同居していたことになる。

オランダの生活環境に慣れた一行は、五月一七日から海軍大尉ディノー(J.A.Dinau)から船舶運用術、砲術などを学び、王立蒸気船機関局監査官の海軍大佐ホイヘンス(H.Huygens)から蒸気機関学を学び、その間に林や伊東らと共に、フレデリクス(Frederik)やスチュルテルハイムから化学を学んだほか、ポンペから理学・化学・人身究理学を学んでいる。また、榎本は西、津田の師事したライデン大学フィッセルング(Simon Vissering)博士から国際法を学んだ。⁽³⁶⁾特に、オルトラン(Jean Félicé-Theodore Ortolan)の『海上国際法論』(Règles Internationals et

Diplomatie de la mer) をフレデリクスがオランダ語に訳した手書きの草稿 (Internationale Regels en Diplomatie der Zee) によって海に関する戦時・平時の国際法規について勉強した。

一八六三年、赤松と榎本はシュレスヴィヒ・ホルシュタイン問題によるデンマークの憲法改正が発端となり、プロイセン、オーストリア・ハンガリー同盟とデンマークとの間で勃発した第二次シュレースヴィヒ・ホルシュタイン戦争に国際観戦武官として従軍した。

一八六四年、榎本はオランダ留学中、パリにいた横浜鎮港使節団正使池田筑後守長發の要請でフランスに向かった。それはフランスで軍艦を作ってもらおうとしたからである。

三使は「過日我士官之もの其許へ引合およひし軍艦は大形にて水入深く、我江戸海等之備には適當ならず思はるれば何れにも拙者共帰国之上、我政府へ可申立存候間、右絵図等は取調被差越候様いたし度、就而は其国帝殿下格別懇親之訳を以て周旋せらる、厚意に随ひ差向別紙通之軍艦其政府之製作場於て新規打立方頼入度候、」(傍線部は筆者が付した³⁷)と、フランス海軍兼植民地大臣ロバ (Chasseloup-Laubat) に軍艦の製造も依頼している。また、使節団は五月、軍艦について詳細な注文を行っている。内容は次の通り。

覚

一、長サ大凡四十間

一、大砲二十六位ヨリ三十位ニ至ル

但し内十六挺位は和蘭三十磅ヘトロツケンカノン餘はヘトロツケンニ不及

一、ブークニ備ル大砲十六磅ヘトロツケンカノン一位

一、食水成丈ケ深カラザル方

一、船具成丈ケリフテ之方

一、蒸気機関 六百馬力ノミナル

一、スクルーフ マンニン氏プリンシーペ

但し上げ下げ之仕掛附之もの

一、石炭囲場十二昼夜分位

一、フアールト 十里

一、水平線上下ノ所即蒸気部屋並火薬庫等肝要ノ

部位丈ケ厚サ英拇半位ノ鉄板ヲ装フ、且甲板

裏面肝要ノ部位ハ英一拇位ノ鉄板ヲ装フ事、

一、大砲ハユイルデツキ^甲に安する事³⁸

杉浦讓の記述によると、元治元年(一八六四)五月四日にオランダ伝習生に電信機で出府を促している³⁹。また、五月七日に杉浦は「此夜荷蘭伝習生内田恒次郎・榎本釜次郎到着す」と記しており、軍艦購入をオランダ留学生(専門家)にさせようとしている。彼らは五月一六日に「今朝荷蘭伝習生内田恒次郎・榎本釜次郎帰国す」と記してあり、約一〇日間、内田・榎本がフランスに来ていた事がうかがえる。この流れについて、岩松太郎は五月一六日付日記の後に「当時仏蘭西伯爵モンブランの内心では、幕府と仏蘭西との間に同盟を結び、其の一着手として仏蘭西は幕府に対し、陸海軍の拡張充実上製鉄所の設置を奨め、軍器・艦船が完備した暁に、幕府をして国内を統一せしめ、新進文明国を建設せしめやうとの目論見であった⁴³」と記している。

その後、フランスは軍艦製造についてツーロンへ指令を贈った。内容は以下の通り。

「予日本使節ツーロン江尋問ある事を其許に告の榮あり、(中略) 是はラシエーン⁽⁴⁴⁾の造船所おゐて日本政府の為コルフエツト形之鉄船打立之事を命し度との事あり⁽⁴⁵⁾」というものであった。

更に使節は外務大臣リュイ (Drouyn de Lhuys) にも軍艦製造の件について書簡を送っている。内容は、以下の通り。

「其国帝殿下厚意に随ひ軍艦新規建方其エキセルレンシー海軍ミニストルへ相托し、留学生之儀者帰国之上我政府へ建白いたし早々差送候様可致候、何れにも其国帝殿下懇親至篤之意を被表候事と其許厚意之周旋ある段、拙者共感謝するは勿論、我政府おゐても定而満悦可致と存候、此段可然上告有之度候、⁽⁴⁶⁾」というものであった。

以上のことから、まず軍艦が建造される可能性が十二分にあつたことがうかがえる。これは使節が帰国した後、約定の廃棄とともに軍艦建造中止もフランス側に告げていることから、結局軍艦建造には至らなかつた。しかし、この代わりとしてオランダで開陽丸が作られることとなつた。また、軍艦建造等といった軍制改革に着手しようと使節達が考えていたことも明白ではなからうか。

幕府からオランダに注文していた軍艦はドルトレヒトのヒップス・エン・ゾーネン (C.Gips en Zonen) 造船所で建造され、元治元年一〇月二〇日、開陽丸と命名された。軍艦砲術監査官デ・フレメリー (Wide Freney) 海軍大佐が顧問をつとめた。また、蒸気機関及びその他の機装はヘレラーツライス (Hellevoetius) 海軍工廠で行なわれた。慶応二

年七月七日竣工となつた。開陽丸は木造螺旋推進式三本櫓の蒸気軍艦であつて、排水量二八一七トン、長さ二四〇フィート、幅三九フィート、四〇〇馬力の補助機関付、二段張甲板、装砲二六門を揃え、定員は四〇〇名であつた。開陽丸は慶応二(一八六六)年一〇月二五日午前八時、オランダのフレッシング港を出帆した。開陽丸廻航には海軍大尉ディノーを指揮官として、士官二名、下士官一四名、火水夫一六〇名、医師一名が乗り組んでいたが、彼らは、日本に到着後は幕府海軍の指揮にあたる予定だつた。慶応三年三月二六日、横浜港に投錨した。榎本は日本に帰ってくると海軍の服制改革に取り組んだ。士官は現在のフロツクコートを平常服とし、ズボンを用いることにした。水夫は大ラシャ仕立ての服を着床する案を立てた。

三 戊辰戦争と榎本艦隊

戊辰戦争が始まつた慶応四年一月三日、薩摩藩は赤塚源六が率いる軍艦春日(副長は伊東次右衛門)、及び輸送艦翔鳳丸(艦長白石弥左衛門)、平運丸(艦長得能左平治)が兵庫沖に停泊し、鹿児島へ帰る準備を整えていた。一方、軍艦頭榎本武揚率いる開陽(筆者註―輸送船として使用する)には「丸」を付すが、戦艦として使用するときには「丸」をとつて使用する)は大阪湾に停泊して鳥羽・伏見の戦いの行く末を見守つた。翌日、平運丸が明石海峡に、春日と翔鳳丸は紀伊海峡に向けて出港した。これを開陽が発見し、停船命令として空砲を撃つが無視したため、臨戦態勢に入った。開陽は春日と翔鳳丸を迎撃し、二五発の弾丸を命中

させ、春日も一八発撃ち返したが、双方に大きな被害はなかった。春日は帰還が目的だったので、これ以上応戦せず、開陽より早い速度で振り切った。翔鳳丸は途中機関が故障し、由岐浦に乗り上げたため拿捕を恐れ、自焼した。また、兵庫港から脱出する際、春日と平運丸は衝突し、春日は船体を損傷した。鹿児島に到着後、鹿児島では修理が不可能だったので、上海で修理することが決まった⁽⁴⁷⁾。こうして日本最初の近代海戦が終結した。

一月八日、榎本が上陸している間、大坂湾に停泊していた開陽を出発させ、一五代將軍徳川慶喜は海路江戸に逃れ、一二日には江戸に到着している。このことにより、西軍が江戸までの制海権を握ることとなった。

二月四日、箱館奉行杉浦兵庫頭誠の日記には、「十二月二十五日、(中略)品川碇泊之蒸気船式艘江乗組逃去候を、御軍艦二而追打及発砲候得共、敵船之存亡も知れ兼候由⁽⁴⁸⁾」と記している。これは慶応三年一二月二五日、薩摩藩が江戸市中取締りの庄内藩屯所を襲撃したことで起こった庄内藩による江戸薩摩藩邸焼討事件に伴う海戦で、薩摩の翔鳳丸が江戸湾に入ったため、幕府の回天が追跡したものである。結果、翔鳳丸が回天に体当たりして相打ちで沈む覚悟をし、船首を反転して回天に突進していったので、これに驚き回天が艦首を廻して衝突を避けた。この少しの隙をぬぐって翔鳳丸は逃げ切ったのである。損傷を修理しながら、翔鳳丸は一月二日に兵庫に到達している。

三月一四日、軍事総裁勝安房守義邦は新政府参謀西郷吉之助へ嘆願書を渡し、その中に「軍艦軍器の儀は残らず取り納め置き⁽⁴⁹⁾」という処置を望むことを伝えた。

三月一五日、明治天皇が大坂に行幸し、「其後海軍整備 叡覧可被為在之旨被仰出候事⁽⁵⁰⁾」と新政府が布告した。観閲式を行なうことが布達されたことがうかがえる。同日、東征軍の海軍が出発した⁽⁵¹⁾。

三月一六日、西軍は慶喜の処置を決めた上で、「軍艦不殘可相渡事⁽⁵²⁾」と東軍に要求した。

三月二三日、佐賀藩の海軍奉行島右衛門(義勇)が海軍先鋒大原俊実と共に横浜にやってきて、密かに勝に「我が軍艦を献じ、速やかに朝臣の列に入るべし。今 朝廷大いに海軍を興起せんとす⁽⁵³⁾」と告げ、勝を西軍に幕府海軍ごと取り込もうとした様子⁽⁵⁴⁾がうかがえる。二六日に勝はこのことを断った。

四月八日、榎本は母、姉観月、妻多津に宛てて、「私事は徳川家御家名と御領地相定まり候迄は決して上陸いたさず⁽⁵⁴⁾」と江戸城無血開城で、江戸城の受け渡しが決まっている状況でこのような心境をしたためている。四月一三日、監軍伊集院兼寛は、「海軍隊より昨日軍艦受に相成賦候処、及延引夫故房相之間え致出船候段、船持より書面を以届申出置、出船之由右に付末何分相分候事⁽⁵⁵⁾」と記している。幕府海軍の受け渡しに関する動向に注意を払っている。

四月一五日、東海道総督府から江戸鎮撫取締徳川慶頼へ「軍艦引渡一条二付而者水夫迄茂可差出趣申立、(中略)夫而巳ならず格別之御仁恵を以寛典之御処置、悉く水泡と可成行者勿論之事二候、(中略)万国之賊船と相成候次第不便之事二付、品海江乗戻シ官軍江引渡之処⁽⁵⁶⁾」と達した。徳川幕府の軍艦を引き渡す予定になっているので、軍艦を品川沖に戻すよう要請した。これに当たることとなったのが、勝安房守義

邦と大久保一翁であった。翌日、高家大沢甚之丞から東海道先鋒総督参謀海江田武次に「然者今朝品海江軍艦式艘着船相成候義二付、(中略)右式艘之内不二山と申軍艦江同人(引用者註―勝)乗組致出帆、残り居軍艦引連品海江江罷帰り候積二御座候」と、勝が徳川艦隊を品川沖へ引き戻すだろうと伝えている。

同月、徳川慶頼は東海道総督府へ「海軍之者共儀者 皇国之御為、数年来航海術研究仕船艦を以身命と致居候儀故、一旦船艦を離候而者各其依頼する処を失、身を惜処無之二至可申と疑慮仕、願意之趣固守致、如何様之中二不都合を醸可申哉茂難計、最以苦心候義二御座候」と、海軍の者たちは皇国のため尽力しているので、赦してもらえよう依頼した。

四月二四日、徳川慶頼は富士・翔鶴・觀光・朝陽の四艦を引き渡すだろうと東海道総督府へ告げた。同日、榎本和泉守武揚は勝へ「素より異論者無之候得共、一同之心御推察可被下候、夫より引渡候四艘江参り、水夫火焚共江も大凡之顛末申論し申候」と四艘の軍艦の引き渡しに同意したことを伝えた。そして、参謀の海江田と木梨精一郎は勝へ「引渡二相成候軍艦二而脱走致シ候陸軍心得違之者、攻撃之御趣意二者無之候間、其段被相心得可申事」と、引き渡す軍艦で脱走する陸軍に通じている者は攻撃の対象にしないと約束を取り付けた。

四月二八日、榎本は西軍の海軍参謀浜野源六へ「四艘軍艦之内、過日御渡申上候觀光丸外、富士山・翔鶴・朝陽三艘、大小砲并附属品共相添本日儘二御引渡申候」と告げ、四艘の軍艦を引き渡した。同日、浜野は榎本に慥かに受け取った旨を伝えた。

その中で、奥羽越列藩同盟に長岡藩が加わり、新潟港が外国製兵器輸

入の大切な拠点となっていた。北陸道の西軍を指揮する山縣有朋は、慶応四年五月一日に海軍を日本海に派遣するよう依頼した。西軍は山縣の要請に応え、長州藩軍艦第一丁卯、及び薩摩藩軍艦乾行(艦長北郷主水久信)の越後派遣を決定した。二隻の西軍軍艦は、下関港で石炭補給担当とされた福岡藩の輸送船大鵬丸と合流した後、敦賀港を経て越後へ向かった。

幕府輸送船順動丸は幕府から会津藩へ貸与された兵器弾薬類を運搬するため箱館経由で越後入りした。佐渡奉行所組頭で恭順の方針をとった中山修輔の西軍に対する弁明によると、順動丸は佐渡の相川港へ碇泊中に奥羽越列藩同盟に接収された。越後では蒸気船燃料用の石炭の調達が困難で、順動丸は代用燃料として薪を使用して行動しているため、速力が発揮できない状態であった。

五月二一日、第一丁卯と乾行は西軍支配下の直江津に入港した。翌日、陸戦支援のため、直江津を出、二四日、出雲崎へ寄港した際に幕府艦隊が寺泊沖へ碇泊中との情報を得た。そこで西軍は幕府艦隊に先制攻撃を決定した。

同日、西軍艦隊は寺泊沖まで進み、それに気づいた順動丸は機関を始動して出港した。西軍の記録によると、順動丸は逃走しようとしたと思われるが、港外で待ち構えた西軍軍艦隊は、乾行が順動丸の前方を遮る一方、第一丁卯は後方に回り込んでの包囲を試み、大砲による威嚇射撃を行なった上で砲撃戦を開始した。砲弾は順動丸の船首や外輪に命中した。順動丸は砲弾三発を乾行に返したが、手前に外れた。

損傷した順動丸は反転し、海岸に座礁した。会津藩士一柳幾馬・一ノ

瀬紀一郎（雑賀孫六郎）ら乗員約一五〇名は、船体を放棄して上陸した。乗員や陸上の駐屯部隊は、会津兵二〇名を除いて弥彦へ向かって撤退した。⁷²西軍は順動丸に接近して拿捕しようとしたが、暗礁が多く危険なため断念した。

西軍は陸路からも部隊を展開して、順動丸の拿捕を試みた。第一丁卯が出雲崎へ戻って連絡し、西軍側の加賀藩・高田藩・与板藩兵が出動したものの、山中に伏せさせていた住民を東軍側の伏兵と誤認し、退却してしまった。⁷³西軍軍艦隊は引き続き、順動丸の監視をし、敵陣を狙って艦砲射撃を実施した。⁷⁴

五月二五日昼頃、乾行乗員が寺泊へ上陸して、幕府側に協力した住民を処罰する布告を掲示した。⁷⁵同日、午後二時頃、順動丸は搭載弾薬が爆発を起こして沈没した。出火原因は不明であるが、鹵獲を逃れるために自爆させたと推定される。⁷⁶五月二六日、西軍軍艦隊は七尾港へ撤収した。同軍艦隊は連日の作戦で燃料不足になっていたが、新政府側の柳川藩輸送船千別丸（艦長曾我祐準）の七尾港到着により、石炭の補給を受けることができた。⁷⁸

この海戦により、西軍が日本海側の制海権を握ることとなった。新政府軍艦隊は五月二九日、佐渡奉行所のある相川へも進駐し、同地に停泊していた桑名藩の和船を拿捕して、積荷の大砲やミニエー銃を鹵獲している。⁷⁹その後も西軍は摂津丸などの艦船を派遣して砲艦射撃や上陸戦の支援などに活用し、七月二九日に新潟港を占領した。⁸⁰

この間、五月二四日に榎本は陸軍総裁だった勝安房守義邦の家を訪れ今後の成り行きなどを話し合ったもの⁸¹と見られる。

六月、イギリス留学から戻った林董三郎は榎本が妻の実家林家を訪れた際に脱走の話を聞いて「予は之を聞いて慷慨自ら禁ずること能わず、開陽丸に乗船されんことを請う」と、榎本に従うことに決めた。榎本は林家の許可があれば、連れて行こうと許可した。そして、六月二二日・二三日頃、林は「開陽丸に乗組て見習士官となれり」と、開陽丸見習士官として同乗したのである。また、同じように山内六三郎（堤雲）も見習士官として榎本に従った。

六月、議定兼輔相岩倉具視は「徳川所有ノ軍艦、今日之勢ニライテ最モ尾大ノ患アリ、何トナレハ天下各藩ノ艦拳テ未タ彼二敵スルモノナシ」と、幕府艦隊の脅威を感じている。⁸⁴

八月一九日夜、榎本艦隊は品川沖から姿を消した。開陽を旗艦に、軍艦回天、蟠龍、千代田形と、輸送船神速丸、長鯨丸、咸臨丸、美賀保丸の八隻だった。品川沖を離れて、旧幕府勢力が終結する仙台を目指して北上した。二〇日、榎本と元若年寄永井玄蕃頭尚志は、①王政一新が強藩の専横によって枉げられ、徳川家の処置が不当であることを論難し、②徳川家臣のために蝦夷地の開拓、及び北門の警備を委任してほしい、という内容の「徳川家臣大挙告文」を勝安房守義邦に託した。⁸⁵林は英語でこれを翻訳し、外交官のまとめ役だったイギリス特派全権公使パークス (Sir Harry Parkes) に送り、明治期にイギリス駐日公使となった林はブルーブック (Blue Book) に綴られているのを確認したと述べている。⁸⁶二二日に嵐にあった艦隊は美賀保丸が銚子沖で沈没し、蟠龍と咸臨丸は下田方面に漂流した。のちに咸臨丸は修理のため、清水港に入港していたところを西軍に拿捕された。開陽は三本マストが破損したが、二

七日には仙台松島に到着した。松島湾内の東名浜あるいは寒風沢に停泊し、破損箇所を修復した⁸⁷。この間の様子を新選組軍監島田魁は「艦中大二百辛千苦ノ思ヲナス」と綴り、厳しい航海の様子がうかがえる。寒風沢で榎本らは松本良順に会った。松本は榎本らに「聞く、米国人の脱走して海賊たるもの上海在りと。私に航して彼徒に頼り畏ながら宮家（引用者註―輪王寺宮公現法親王）を誘ひ、桑名侯（引用者註―松平定敬）を随従せしめ、有志者数百を率ひ、内米賊百五十名斗を交ぜ、一航四日市に至らば、桑名の残士必ず来り会すべし。（中略）其山崎の所為を責て先鋒とし、尾州を破り、彦根を攻め、帝都に上り、従来薩長の所為皆陛下を欺き奉りたる所以を天下に告げ、速に米國に使節を立て、其兵を借り、尾紀以下十八国守二、百六十諸侯の罪を正さば、王政復古期して待つべし」とアドバイスを送ったところ、榎本はこの説に喜び、土方は拱手し、松本のいうことはうますぎることが多いが、私は「死神」に取りつかれているので、死すべき時に死すといひ、松本に早々に横浜に戻るよういひ、松本はアメリカの力を借りて、戦争を終らすべきだと主張したことを批判した。

二三日には、東軍の拠点だった会津若松城に西軍が押し迫り、更に九月一二日、仙台藩が降伏した。これを知った榎本と元新選組副長土方歳三が仙台城に登城し、執政大條孫三郎と遠藤文七郎を説得したが、藩論を変えることはできなかった。会津で戦った東軍も九月一六日に仙台に到着し、ようやく旧幕府陸海軍がそろった。榎本は蝦夷地に向かうことを決め、艦隊を北上させることにした。

幕府が仙台藩に貸与していた大江丸、鳳凰丸、長崎丸を接收し、陸軍

を乗船させた艦隊は一〇月一二日、仙台の東方にある折ノ浜を出港した。翌日には宮古湾銚ヶ崎港に入り、準備を整えて一七日正午、北上を開始した。江戸湾を離れた時からフランス人陸軍伝習教官ブリュネ (Jules Brunet) 陸軍砲兵大尉とカズヌーヴ (Andre Cazeneuve) 陸軍馬術師範が同行した。仙台で教え子の伝習隊長大鳥圭介との再会を果たした。更に、ブリュネの後を追ってきたフォルタン (Arthur Fortant) 近衛騎兵隊伍長、マルラン (Jean Marin) 近衛歩兵大隊軍曹、ブッフイエ (François Bouffier) 第八猟歩兵大隊軍曹が宮古湾で合流し、また、箱館でもプラディエ (Auguste Pradier) スワーブ兵下役、トリブー (Tribout) 陸軍差図役下役、フランス東洋艦隊ミネルヴァ (Minerva) 号の海軍差図役見習ニコール (Henri Paul Hypolyte de Nicol) 同海軍差図役見習コラッシュ (Felix Eugence Collache) 上海から箱館にやって来たフランス海軍砲兵下役クラトー (Clateau) が箱館で加わった。

プロイセン代理公使ブランド (Max von Brandt) は榎本艦隊を「艦隊の行動は単なる兵士の反乱としか見られなかった」とし、もはや中立宣言を守る理由はないと判断したようである。

宮古湾を出港した東軍は、再び嵐にあり、目的地の鷲ノ木沖に回天が到着したのが、一九日夜だったが、全艦隊が終結するのは二三日のことだった。この間、広田浜に停泊中の千秋丸を奪取している。本格的な上陸が始まったのは二二日だが、先発隊として遊撃隊の人見勝太郎ら三〇名が箱館府への歎願使節として五稜郭へ向けて出発した。箱館府は清水谷公考が総督となって弘前藩や松前藩と協力しながら防禦に当たっていた。

一〇月一日、島田魁の日記によれば、「独り回天艦気仙ニ至リ千秋丸ヲ奪フ」と記しており、この時、元徳川幕府の軍艦で仙台藩に預け、西軍が使用していたこの艦を奪い返したことになる。

一〇月二一日、奥羽鎮撫総督府は盛岡藩に「旧幕盤、自然当領内へ来航、謝罪等不申出乱暴狼藉致候節は、兼て為奏実効飽迄死力を尽し防禦可致、猶時宜ニより秋田・弘前両藩へ急報可致候事」と盛岡藩に幕府艦隊襲来に備えるよう秋田・弘前両藩へ通報するよう命令が下った。

二二日に東軍本隊は五稜郭に向けて鷺ノ木を出発した。二三日、西軍の夜襲があり、これを予期していた大鳥圭介は伝習士官隊、伝習歩兵隊、遊撃隊、新選組、砲兵隊を率いてこれを迎撃し、ここに箱館戦争が勃発する。

二四日、清水谷公考は弘前藩主津軽承昭に「徳川脱艦何時当港へ襲来難計ニ付援兵願候」と、援兵派遣要請を行なった。

二五日には、清水谷が箱館府を放棄し、軍艦カガノカミ（加賀守、秋田藩籍陽春艦）で青森に逃れたため、翌日、東軍は五稜郭へ無血入城を果たした。この時、東軍の回天が鷺ノ木より廻航して、箱館港内に滞在していたのでこれらの船を目撃したが、開港場があり、居留地や外国船を考慮した結果、発砲に至らなかったという。二六日に五稜郭の入城を果たした東軍は二八日に松前藩を攻略することとなった。攻略軍は土方歳三率いる陸軍隊と額兵隊、彰義隊で行なった。

二七日、箱館港に回天がいることも知らずに入ってきた秋田藩籍の高雄が榎本軍に拿捕された。

蟠龍による松前と福島への艦砲射撃が行なわれた十一月一日、東軍は

宿营地知内に松前兵の襲撃を受けたが、蟠龍の砲撃などにより、これを撃退した。更に進軍するものの回天、蟠龍は松前沖に廻航できたが、波が高く有効な艦砲射撃ができず、城の外郭として構成されていた砲台や、城下の築島砲台などの砲撃に晒されてしまった。城下に侵入した東軍が高地にある法花寺を占拠し、ここから砲撃を加え、築島台場を沈黙させ、更に城への砲撃を行なった。松前藩主松前徳広は既に館城に退いていたため、松前城を攻略し、館城へ兵を差し向けた。十一月一日に館城を陥落させた。一方、松前徳広は一二日に江差に退き、二二日に平館へ上陸するも、度重なる敗戦と疲れで二九日に弘前において肺結核で死去した。

十一月五日に松前城を攻略した東軍は、一日から松前兵が敗走した江差方面に向けて進軍した。一三日に大滝峠に布陣した松前兵を敗走させ、さらに北上を続け一五日に江差に入った。江差にはすでに開陽が到着しており、敵兵の姿も見当たらなかった。

十一月八日、熊本藩士で軍監の野田大蔵（豁通）は軍務官へ回天と蟠龍が七日、大森にやってきて問い合わせたところ、「青森表へ歎願の趣有之罷越候処、風悪ク、且買物有之上陸仕候段申出候由、（中略）全ク様子窺ノ為メ罷越候ト相見へ（後略）」と報告した。東軍は風が悪く、買物に来たため、青森港に寄ったとしているが、野田は偵察であると考えている。また、野田の見立てでは「第一可恐ハ此機ニ乗シ奥羽の残賊再起ニ御座候」と、幕府艦隊が来たことで奥羽の諸藩が呼応する可能性があると伝え、これに危惧している。

同月九日に榎本武揚はイギリスとフランス軍艦の船将たちに、蝦夷地

に軍政を敷いた東軍を「事実上の政権」(authorities de facto)と認めさせ、更に新政府との仲介を依頼した。

同月、徳川脱藩海陸軍名義で奥羽越列藩同盟へ、「我等既ニ身ヲ容ル、ノ地ナシ、去トテ降伏シテ謝スヘキノ罪ナシ、茲ニ蝦夷地ハ皇国北門枢要の地ナレハ、此ニ開拓の基ヲ創メ、長ク外夷窺竄ノ念ヲ絶ントス」と、艦隊が北上してきた目的は「皇国北門枢要の地」であると認識し、開拓と防衛を行なうという大義名分を掲げたのである。これに対する弘前藩の返答は青森町奉行野呂謙吾と小山内又右衛門が返書を出し、「右重大の事件ニ付、率爾ニ御答難相成」と、幕府艦隊が蝦夷地に来たことは重大な問題だが、返答しにくいとした。

その夜、天候が悪化し、江差沖に停泊していた開陽は暴風雪の中、浅瀬に吹き流されて座礁した。翌日も暴風は続き、開陽は離礁することができないまま破船し、沈没してしまった。更に開陽救出のため江差に向かった神速が、同じく座礁、沈没するという二次災害まで発生した。

開陽の江差廻航は、ここまで戦功のない海軍の不満を解消するためのものだったといわれている。東軍の蝦夷地渡航は、西軍に対して制海権を握ることができたという圧倒的な海軍力に裏付けられていた。その海軍力は開陽があつたことだったので、この沈没は東軍にとっては大きな痛手となった。

一月一九日に藩主を青森に送り出した松前藩は、二〇日に降伏を表明した。こうして蝦夷地制圧が完了した。

一月二一日、盛岡藩主南部利恭は秋田藩主佐竹義堯に幕府艦隊襲来に備えて幕府艦隊追討の先鋒となるよう依頼した。この日の島田魁日記

に注目する記事がある。軍艦として回天、蟠龍、千代田形が使用され、諸隊の運送に二番回天、長鯨、千秋、鳳凰が使用されており、戦闘用の船と輸送用の船が明確に分けて認識していることがうかがえる。なお、軍艦にも陸戦隊を乗せているが、これはイギリス軍艦などにも見られるため、これを統一して「輸送艦隊」と見なすのは少々違うように思われる。戦略や戦術により、その用途が変わってくるのは当たり前である。

一月二四日、津軽承昭は新政府に箱館府と松前城が陥落し、大艦隊も迫っているので、「早速官軍御援兵被仰付被下度」と、幕府艦隊襲撃の危惧から西軍の援軍要請を行なった。承昭は熊本細川家から津軽家に養子に來たので、恐らく軍務官副知事長岡護美が関わったものと見られる。二五日にも同様に「軍艦不都合進撃遷延の内」と、幕府艦隊を警戒している様子が見える。

更に、松前攻略を終えた土方が箱館に凱旋した一二月一五日、蝦夷地平定の祝賀会が開かれた。箱館港の万国旗を飾り付けた軍艦や弁天台場、五稜郭からは一〇一発の祝砲が放たれた。

同時に士官以上になると入札が行なわれ、これが日本で初の選挙となった。こうして榎本を総裁とする軍事政権が誕生したのである。また、各地の防衛担当も決定され、東軍は西軍の来攻に備えて新たな防備施設を築造しながら、春を待った。榎本が立ち上げた政権について、樋口雄彦氏は「榎本らが真に民主的だったわけでも、独立国を目指したわけでもなく、本質を見誤った評価であることはいうまでもない」としている。

明治二年(一八六九)一月、西軍は幕府がアメリカから購入したストーンウォール・ジャックソン(Stonewall Jackson)号、すなわち軍艦甲鉄

を入手している。この軍艦はアメリカ南北戦争中に南軍が発注し、フランスのポルドーで建艦されたものである。慶応四年四月に横浜に廻航されたが、発注した幕府はそこになく、アメリカは局外中立を貫き、日本政府の軍艦として新政府に譲渡した。これまで、局外中立を保っていた各国がストーンウォール号を新政府に渡したことによって、国際的な地位も含めて圧倒的に新政府側が有利になった。

一月二六日、榎本は母、姉観月、妻多津に宛てた書簡で「昨冬十二月十六日迄に当嶋一圓手に入れ当節の處にては夫れに防禦□開拓の手掛に居り三千の軍卒とも一同必死の氣組かわゆく又ふびんとも存ぜられ候」と、蝦夷地における意気込みを記している。また、「フランス団士官七名も一同の義気に感じ死生をともにいたし昼夜尽力いたし呉れ候事忝く仕合に御座候」と、フランス士官たちの働きにも感謝をしている。

二月二八日、岩倉具視は三条実美に意見書を送った。その意見書では蝦夷地に関して、一つ目に、蝦夷地の開拓が「皇国の隆替」という認識にたっており、二つ目に幕末以降の幕府の蝦夷地政策を「姑息」として批判している。すなわち、蝦夷地は新政府にとっても緊要の課題だったのである。

三月六日、青森船問屋伊東彦太郎（隴屋）は「松前福山へ出帆せる蒸気船、又々今日入津す。これは福山の敵方模様見聞に参れる由なり」と、長州藩の船が偵察にやって来たことを記している。ちょうどこの頃、西軍はストーンウォール号を手に入れていたが、箱館に到着するにはまだ時間がかかる状況だった。

三月一六日、伊東彦太郎は「箱館敵徒の脱艦蟠竜丸が入津。尤も當海

の船々潤懸せる場所近く参れるに、停泊いたさず直ぐさま箱館へ出帆す。これは一兩日中東京よりの軍艦当所へ入津の風聞を箱館にて聞き、様子窺いのため参れるものなり。尤も直ぐさま出帆につき、この度は市中も余り騒ぎ立て申さず」と記し、蟠龍は西軍の船が青森に入港したか偵察に来たことを伝えている。

甲鉄を旗艦とする新政府艦隊八隻は、三月九日に品川を抜錨し、一六日に浦賀沖を通過、そして宮古湾鉞ヶ崎に到着している。やがて、箱館にも新政府艦隊北上の報せが届き、甲鉄奪取作戦が立案された。

発案者はニコールで、一九日に開催された初会合には、クラッシュ、フォルタン、マルラン、そして回天艦長甲賀源吾の五名が参加した。自艦を隣接させ、兵士を乗り込ませ制圧し、艦ごと奪うという作戦を立てた。

作戦には回天、蟠龍（艦長松岡磐吉）、第二回天（元秋田藩籍高雄、艦長古川節蔵）の三艦が使用されることとなり、旗艦となる回天に海軍奉行荒井郁之助、陸軍奉行並土方歳三らが検分役として乗船し、各艦に海軍経験者のニコールが回天に、クラッシュが第二回天に、クラトーが蟠龍に乗り込むこととなった。

甲鉄に移乗する役目の兵士が乗り込んだ三艦は、二一日午前四時半頃に箱館を出発し、津軽海峡を横断し、二二日早朝には鮫浦沖に到着し、情報収集に当たっている。

夕刻になり、更に南下を開始したが霧が深くなり、午後十一時半頃に霧がおさまったものの、三艦はそれぞれを見失ってしまった。

二四日早朝、宮古湾の南二〇キロにある山田湾付近を航行していた回

天は、第二回天を発見し、二艦で山田湾大沢に入港した。ここで、再びお互いを見失うことがあれば、鮫浦沖で落ち合う約定を結んでいたため、合流できた。しかし、この時、蟠龍とは合流できなかった。蟠龍は鮫浦に待機していたため、蟠龍は約定を守ったこととなる。

また、第二回天は機関を損傷しており、長時間の航行による兵士の疲労回復、及び更なる情報収集と機関修理のため、大沢湊で一日過ごすこととなった。そして、自らの碇泊位置を確認した二艦は、更に新政府艦隊が数日前に宮古湾鉦ヶ崎に入港した情報を得た。

この情報を得た二艦は翌早朝に作戦決行をすることを確認し、二五日午前三時、回天はアメリカ国旗、第二回天はロシア国旗を掲げ、大沢湊から出撃した。⁽¹²⁾

二艦は宮古湾に向けて北上を開始するも、第二回天は石炭不足で速力が上がらないため、回天一隻で決行することとなった。新政府艦隊は一日から鉦ヶ崎港に入港していたが、風浪を避けるため二五日まで出向を遅らせていた。回天は星条旗を掲げ、港の奥へ進んでいった。甲鉄と約百メートル近づいたところで星条旗を日章旗に替え、面舵を切ったが、回天には面舵が利きにくいという癖があり、失敗したが、すぐに立てなおし、甲板が最も高い前方の一部のみが甲鉄と接触したため、移乗兵は三メートルほどの高さを飛び下りなければならなかった。回天甲板上には死傷者が続出した。これは甲鉄に備え付けられていたガトリングガンによる攻撃とされているが、日本に三台しかないこの銃を海風に晒して使用するとは考えにくい。四方八方から砲撃を受けたと考える方が妥当だろう。それは、新選組大砲下役立川主税が「其外二敵艦七隻有り、他

艦ヨリ弾丸雨ヲ飛ス、遂ニ奪事能スシテ退ク」と記していることから明らかであろう。なお、この戦いの中で、西軍の戊辰艦に多大な被害があり、怪我人と死人併せて約三〇〇人が犠牲となっている。⁽¹³⁾

作戦開始から三十分後、作戦失敗を知ると共に、回天艦長甲賀源吾の戦死を知り、宮古湾の入り口で第二回天と出会い、共に北上したが、第二回天の速力が上がらず、西軍に追いつかれたため、陸に逃れた兵は艦を自爆し、投降した。回天は鮫浦沖から南進してきた蟠龍と共に北上を続け、二六日、箱館に到着した。新政府艦隊も青森まで迫った。

三月二四日、伊東の日記には、「箱館より敵の軍艦回天丸、その外二艘合せて三艘八戸へ入津の由。未だ双方放発にならぬに、とりあえず八戸様より惣督清水谷様へ注進の早打なる由」と見られ、回天、蟠龍、第二回天の三隻の軍艦はストーンヤール号が宮古湾に停泊している情報を得たため、八戸の鮫港付近に投錨した。こうして東軍がストーンヤールを奪取する作戦が開始されたのである。

三月二五日、島田の日記には、「直ニ鉄艦ノ中央ヲ衝キ、日ノ丸ノ旗ヲ翻シ、巨砲ヲ放。其勢ヒ恰モ雷激ノ如ク鉄艦將ニ傾キ、覆没セント欲ス。我数人自刃ヲ拔テ身ヲ躍テ其艦ニ入り、烈戦殆ト奪ト欲シ、然レ共鉄艦亦其備有り、且他艦ヨリ巨砲ヲ放ツ。雷ノ如ク細丸雨飛ニ似リ」というような戦いであった。

三月二六日、宮古湾海戦で回天を撃退した西軍艦隊は青森港に入り、回天の砲弾数発を喫水線付近などに受けた徳島藩籍の戊辰は、沈没は免れたが修理の必要があり、負傷者と共に東京に戻った。すでに陸軍を青森に集結させていた西軍は、海軍の到着を機に蝦夷地

上陸を實行することになった。輸送船の飛龍丸、豊安丸の他に、翔鶴丸、乙女丸もチャーターしての渡海作戦である。こうして西軍には朝廷の甲鉄、薩摩藩の春日、長州藩の丁卯、朝廷の陽春、同飛龍、筑後藩の晨風丸、広島藩の豊安の七隻が終結した。

三月二十七日、伊東の日記には「敵の第一緊要の船は回天丸の由なり。これは旧幕府にて異国より六十万両で買入れの船の由。この度天朝よりお差しの船の内、第一は甲鉄丸にて、これは鉄造りの船にて敵の軍艦へ突込む船の由なり。此方にも内外の混雑申すばかりなき処より、軍艦の見物に参る事も出来ず」と見られ、両軍の軍艦の一番が何かを改めて確認している。

四月二日、桑名藩士で新選組差図下役の石井勇次郎は「今函館ノ我軍、海軍ハ已ニ敗レ陸軍ハ限り有ルノ兵ヲ以、限り無キノ兵ニ敵ス」と記し、現段階では海軍より陸軍が戦力になると認識している。

当初、四月六日に渡海が予定されていたが、風浪のため見合せとなり、八日午前十時半に出港、翌早朝から江差の北方一〇キロにある乙部への上陸作戦が決行された。江差に拠点を置いていた東軍は乙部へ駆けつけたものの、本格的な迎撃には間に合わなかった。西軍は大きな抵抗も受けることなく、上陸を続行した。

正午までに上陸を終えた西軍は、江差に向け進軍を開始する。江差には甲鉄、春日の艦砲射撃を加えており、江差奉行の松岡四郎次郎は、砲台等の防衛施設が調わない状況での抗戦の不可を悟り、松前方面への撤退を決めていた。西軍は江差を占領し、松前口、二股口の二道に、当初予定になかった木古内を加え、三道から箱館を目指すこととなった。

四月八日、伊東は「大甲丸（引用者注―大江丸のこと）と申す蒸気船入津せり。これは徳川の船にて脱艦の内なる由。然るに箱館の賊徒、イギリスより金二万両借用いたせる処、この度天朝より御征討の軍艦向いしことにつき、イギリスより賊の方へ催促せるが、賊の方にて返金遅滞になりたり。随ってイギリス人この船へ大勢乗込み、押して出船し当青森まで参れる由」と記している。このことから、東軍は軍資金が底をつきつつあることがうかがえる。

同日、西軍は箱館に滞在中の外国人領事や商人たちに退避を求め、最終戦に備えた。

四月一日、木古内口への進撃命令を受けた西軍の弘前兵は、その日の内に湯ノ岱に到着、翌日には笹小屋に到達している。更に前進した弘前兵は、一二日、木古内付近で東軍と小競り合いを行なった。いったん引きあげるも、払暁に前進してきた東軍の攻撃を受け、笹小屋まで退却した。

木古内口は、松前口の上ノ国から木古内に抜けるルートである。西軍の乙部上陸を受けて、松前口の守衛には陸軍奉行の大鳥圭介が赴くこととなり、一二日夕刻、両ルートが合流する木古内に到着した。

笹小屋で後続の大野兵、松前兵、福山兵が合流した西軍は、一三日午前零時、木古内に向けて進軍を開始し、三時半頃から激戦となった。大鳥指揮する東軍は予め構築してあった台場から攻撃を加え、更に一隊を迂回させた。挟撃を受けた西軍は持ちこたえられず、午前七時頃、笹小屋に撤退した。

いったん湯ノ岱に引きあげた西軍は兵を増強し、二〇日、再び笹小屋

を発信した。濃霧にも助けられた西軍は東軍への奇襲に成功し、不意を突かれた東軍は、反撃に転じることができないままに総崩れとなって泉沢方面へと敗走した。

札苅まで追撃した西軍に回天、蟠龍が砲撃を加えて敗走させた。だが、西軍による木古内占領は、一七日の松前戦に敗れて知内に待機していた東軍の孤立を意味していた。退路を断たれた東軍を救出するため、いったん五稜郭に戻った大鳥軍は再出撃した。

この形式は、西軍に必ずしも有利とはいえなかった。退路を断たれた東軍が背水の陣でのぞみ、木古内に向けて進撃し、泉澤に退却した東軍が攻勢に転じれば挟撃にさらされることになるため、木古内の西軍はすぐに笹小屋に撤退しなければならなかった。午後五時頃、回天、蟠龍は、木古内沖に出撃してきた春日と交戦し、箱館に撤退した。翌二一日、東軍は西軍が撤退した木古内を奪還し、松前口の部隊と合流したが、敵艦出現の前に木古内での防衛を断念、矢不來周辺での決戦を期して退却することになった。翌日、西軍は再び木古内に入った。

江差と箱館を最短距離で結ぶ二股口の守将として、陸軍奉行並土方歳三が五稜郭を出発したのは、四月一〇日のことだった。二股口には一六とも二二ともいう胸壁で構成された台場が築かれ、更に進んだ天狗岳には偵察用の陣地が設置された。

一三日午後二時頃、稲倉石を出発した西軍は、二股口を守備する東軍に攻撃を開始した。天狗岳の東軍を短時間で敗走させた西軍は、勢いに乗って台場に押し寄せるが、激しい銃撃にあった。雨天の中、銃撃戦は夜を徹して続行され、東軍の使用した弾丸は三万五千発にもほる。

翌朝六時、弾薬が欠乏した西軍は、台場を突破できず撤退し、一旦戦鬪は終了した。二股口を突破することは難しいと判断した西軍は、急遽、蛾虫から落部に抜ける安野呂口を進軍に加え、一五日から行軍した。

兵力を増強した西軍が二股口の台場に迫ったのは、二三日午後四時頃だった。再び激しい銃撃戦となり、東軍は連射によって熱を帯びた銃身を、沢から汲みだした桶の水で冷やししながら射撃を続けた。二五日午前三時まで続いた激戦でも台場が陥落することはなく、戦鬪は再び西軍の撤退となった。

各地の東軍の拠点が次々と破られる中、不敗の陣を誇った二股口台場だったが、二九日に榎本武揚から撤退命令が届いた。松前口の矢不來台場、更には有川が破られたことにより、退路を断たれる恐れがあったからだ。五月一日、西軍は東軍が去った台場を通過し、箱館平野に進出した。

松前口の西軍は、松前城奪還をしたい松前兵を先鋒に進軍した。四月一日夕刻、東軍は松前の守備隊と共に迎撃し、西軍を小砂子まで退却させた。東軍は木古内口を西軍に突破された場合、退路を遮断される恐れがあり、一旦松前に引き上げたが、一六日、一部が江良まで再進した。

一七日朝、更に本体が清部まで前進したが、西軍の春日に艦砲射撃を浴びせられなすすもなく敗退した。西軍は軍艦が従事し、陸軍の上陸作戦の援助をした。更に、東軍が守備を固める松前沖に甲鉄・陽春・丁卯・朝陽の全軍艦が出勤し、松前城下西方の折戸や付近の台場に艦砲射撃を加え、松前総攻撃が始まった。海軍の援護を受けた新政府陸軍は前進し、激戦を繰り広げた。午後六時頃には松前城は陥落し、敗走した東

軍は翌日、福島に到着した。しかし、回天や蟠龍の射撃援護により、「官軍忽敗ス」とある。これまで、戊辰戦争はいかにも西軍が圧勝したかのような評価だったが、必ずしもそうではなくて東軍も押し返しをはかることができていたことがうかがえる。

四月二一日、木古内を撤退した東軍は、矢不來を中心に茂辺地から富川にかけて構築された台場に布陣した。二九日午前五時頃、海上の朝陽、陽春は茂辺地の台場に、甲鉄、春日、丁卯は矢不來に艦砲射撃を開始した。西軍陸軍による攻撃が始まった時には、東軍は組織だった迎撃をできる状態にはなく、十時半頃までに、富川までも西軍に制圧された。

矢不來方面の危機が五稜郭に伝わると、総裁榎本らが出陣し、有川に逃れた東軍を叱咤督励したが、敗走は続いた。ついには七重浜にまで防衛線を後退せざるをえなくなった。

五月一日には七重浜からも東軍の姿は消えており、西軍は更に前進することになる。七重浜に入った西軍に対し、その夜から東軍の夜襲が繰り返されたが、戦況を覆すことはできなかった。なお、二股口に出張していたフォルタンが箱館に戻った五月一日、ブリュネをはじめとするフランス人たちは箱館港に停泊していたフランス軍艦コエトロゴン(Coetlogon)号に乗り、箱館を脱出している。新政府とフランスとの関係を憂慮してのことだった。

一方、海上でも、四月二九日から五月一日にかけて発生した事件により、東軍の勢力範囲が極端に狭まった。二九日夜、千代田形が弁天岬台場沖で座礁事故を起こした。船将の森本弘策は、機関を破壊し退艦するよう命じたが、千代田形は満潮時に離礁、無人のままに洋上を漂ううち

に西軍に拿捕されてしまった。

五月七日午前六時、箱館湾に侵入した甲鉄、春日、朝陽は、回天、蟠龍に迫り、陽春、丁卯は弁天岬台場に向かった。蟠龍は機関が故障していたため、動くことができるのは回天だけだった。また弁天岬台場では、三日夜、大砲に釘が撃ち込まれる事件が発生していた。

四時間に及ぶ海戦で、甲鉄の攻撃が命中した回天は重要機関部に被弾して航行不能となり、ようやく弁天岬台場近くの浅瀬に乗り上げることができた有様だった。碇泊して修理を受けながらも砲撃を続けていた蟠龍は、ようやく運転可能となったが、主力艦回天が運行不能となったことは東軍にとっては大きな痛手であった。こうして西軍は、日本における制海権を完全に握ることに成功した。

五月一日、西軍による箱館総攻撃が開始された。東軍は、五稜郭から箱館にかけての範囲に勢力を縮小していた。甲鉄、春日が弁天岬台場に向かい、朝陽、丁卯が七重浜から、陽春が大森浜沖から陸軍援護の艦砲射撃を開始し、陸軍は大川と七重浜から五稜郭を指した。東軍も大鳥が出陣したが、五稜郭北方の四稜郭、権現台場が陥落した。

西軍は、五稜郭を目標とする正面攻撃の他に、奇襲攻撃の他に、奇襲攻撃を用意していた。飛龍、豊安に乗船した陸兵を箱館山方面へ上陸させる作戦だった。箱館は五稜郭方面を除き、三方を海に囲まれており、東軍は戦闘初期から地上戦を予期していなかった。箱館市街は一気に西軍に制圧され、東軍諸隊は撤退を余儀なくされた。

一方、箱館湾では激しい海戦となった。すでに航行できない回天は「浮砲台」として弁天岬台場と共に砲撃を繰り返した。唯一航行可能な

蟠龍は七重浜沖で敵艦と交戦、七時半頃に朝陽の火葉庫に一弾を命中させ、これを撃沈した。この快挙をきっかけとして苦戦を強いられて東軍は反撃に転じたものの、やがては西軍の攻撃に押し戻された。

一本木で指揮を執っていた土方は、箱館方面の奇襲部隊と七重浜沖の正面攻撃部隊という両方向の防戦を指揮していたが、被弾し戦死した。

また、この西軍の総攻撃の中、蟠龍は西軍の朝陽丸を沈めたが、ほかの艦の攻撃を受けたため、引き返さざるを得なくなった。⁽⁴⁾

一二日、西軍は、五稜郭など東軍陣地に艦砲射撃を浴びせ、その一方、終戦調停を開始した。

一五日、箱館奉行永井尚志が再三の申し入れに降伏を決定した。箱館奉行並中西三郎助が守っていた千代ヶ岡台場は、西軍からの降伏勧告、更には五稜郭からの退去勧告を拒絶し、一六日から開始された攻撃で全員戦死した。

弁天岬台場、千代ヶ岡台場を失った五稜郭はついに降伏を決し、一七日、総裁榎本、副総裁松平太郎は、西軍参謀黒田了介、海軍参謀で佐賀藩士増田虎之助と、亀田三軒屋で終戦調停の会見を行なった。

一八日、五稜郭は開城、箱館戦争、ひいては戊辰戦争が終結した。二四日に西軍の大坂艦が青森まで来たので、島田らはそれに乗り、六月二〇日に兵部省達しにより、名古屋藩お預けとなった。⁽⁵⁾

むすびに

榎本は堀に従って蝦夷地に赴いたことで、北方の様子を知ることがで

きた。この体験が、江川塾で砲術や英語を学ぶきっかけとなり、更には長崎海軍伝習所で海軍を学ぶことになったものと見られる。

オランダ留学で、実際に実地体験をすることによって、国際感覚が磨かれ、帰国後の蝦夷地政権樹立につながる。

蝦夷地で政権を担った榎本だったが、弾薬等の補充、軍艦の修復場がない状況で戦い続けなければならない状況を考えると早期決戦で西軍を追い込まない限り、勝機はなかったものとみられる。また、榎本軍は天候など不運な面があったが、軍艦を失ったことで短期決戦の構想も薄れていった。よって、外交手段で乗り切らない限り、政権の維持は難しかったものと推察される。

榎本の「北門の警備」構想の延長戦が明治期の樺太・千島交換条約だったと考えられるし、明治に小樽に商會を樹立するなど、開拓に必要な人材の教育と対ロシアの鞘となることを考えていたように思われる。よって榎本の生涯は常に「北門」にあったといえるのではなからうか。

註

- (1) 一戸隆次郎『榎本武揚子』 高山堂 一九〇九年。
- (2) 加茂儀一『榎本武揚』 中公文庫 一九六〇年。
- (3) 井黒弥太郎『榎本武揚伝』 ゆまに書房 一九六八年、同『榎本武揚』 新人物往来社 一九七五年。
- (4) 榎本隆充・高成田亨編『近代日本の万能人・榎本武揚…1836—1908』 藤原書店 二〇〇八年。
- (5) 加茂、『榎本武揚』、二五頁。
- (6) 加茂、『榎本武揚』、二六頁。

- (7) 加茂、『榎本武揚』、二七頁。
- (8) 田中惣五郎『幕末海軍の創始者勝海舟・榎本武揚伝』 日本海軍図書 一九四四年 一六六一―一六七頁。
- (9) 前掲、『幕末海軍の創始者勝海舟・榎本武揚伝』、一六九―一七一頁。
- (10) 加茂、『榎本武揚』、三二頁。
- (11) 加茂、『榎本武揚』、三二頁。
- (12) 加茂、『榎本武揚』、三三頁。
- (13) カッテンディーケ、水田信利訳『長崎伝習所の日々』東洋文庫二六 平凡社 一九六四年 八五頁。
- (14) 前掲、『長崎伝習所の日々』、八五頁。
- (15) 「開陽丸建造并留学生派遣関係公信」(日蘭学会編、大久保利謙編著『幕末和蘭留学関係史料集成』 雄松堂書店 一九八二年)、七頁。
- (16) 加茂、『榎本武揚』、四二―四三頁。
- (17) 宮永孝『幕府オランダ留学生』 東選選書73 東京書籍 一九八二年 二二頁。
- (18) 加茂、『榎本武揚』、四四頁。
- (19) 加茂、『榎本武揚』、四五―四六頁。
- (20) ボードウアン、フォス美弥子訳『和蘭領事の幕末維新 長崎からの手紙』 新人物往来社 一九八七年 八七頁。
- (21) 前掲、『和蘭領事の幕末維新 長崎からの手紙』、八八頁。
- (22) 榎本釜次郎『渡蘭日記』(日蘭学会編、大久保利謙編著『幕末和蘭留学関係史料集成』 雄松堂書店 一九八二年)、一六九頁。
- (23) 前掲、『渡蘭日記』、一六九頁。
- (24) 前掲、『渡蘭日記』、一七三頁。
- (25) 前掲、『渡蘭日記』、一七六頁。
- (26) 前掲、『渡蘭日記』、一七七頁。

- (27) 前掲、『渡蘭日記』、一七八頁。
- (28) 前掲、『渡蘭日記』、一七九頁。
- (29) 前掲、『渡蘭日記』、一八一―一八二頁。
- (30) 前掲、『渡蘭日記』、二〇四頁。
- (31) 前掲、『渡蘭日記』、二〇五―二〇六頁。
- (32) 加茂、『榎本武揚』、五四頁。
- (33) 前掲、『幕府オランダ留学生』、七五頁。
- (34) 加茂、『榎本武揚』、五六頁。
- (35) 前掲、『幕府オランダ留学生』、七六頁。
- (36) オランダ留学生の万国公法に関する研究については、大久保健晴『近代日本の政治構造とオランダ』 東京大学出版会 二〇一〇年に詳しい。
- (37) 佛國海軍卿へ軍艦製造ヲ囑セシ使節ノ書翰(『幕末維新外交史料集成 第六卷』)、一一九頁。
- (38) 軍艦製造注文ノ記(『幕末維新外交史料集成 第六卷』)、一一九―二〇頁。
- (39) 杉浦讓『奉使日記』(『杉浦讓全集』第一卷 杉浦讓全集刊行会 一九七八年)、一六〇頁。
- (40) 前掲、『奉使日記』、一六〇頁。
- (41) ここでいう帰国とはオランダへの帰国の事。
- (42) 前掲、『奉使日記』、一六一頁。
- (43) 岩松太郎『航海日記』(『井原市史』 井原市史教育委員会 一九六四年)、三〇七頁。
- (44) ロシユフォールの事だろう。
- (45) 佛國海軍卿ヨリ同國「ツローン」ノ奉行ニ寄シ書翰(『幕末維新外交史料集成 第六卷』)、一二〇頁。
- (46) 事務大臣ニ軍艦製造ノ周旋及国帝ノ懇篤ヲ謝スル使節ノ書翰(『幕末

維新外交史料集成 第六卷)、一二〇頁。

- (47) 保谷徹『戦争の日本史18 戊辰戦争』吉川弘文館 二〇〇七年 七
七、一〇四頁。
- (48) 小野正雄監修『杉浦梅譚 箱館奉行日記』杉浦梅譚日記刊行会 一
九九一年 四六一頁。
- (49) 「勝海舟日記」(勝部真長・松本三之助・大口勇次郎編『勝海舟全集』
一九 勁草書房 一九七三年)、三一頁。
- (50) 佐々木克・藤井讓治・三澤純・谷川穰編『岩倉具視関係史料』下 二
〇一二年 三三頁。
- (51) 前掲、『岩倉具視関係史料』下、三頁。
- (52) 伊集院兼寛「東征日記」(尚友俱樂部・山崎有恒編『伊集院兼寛関係
文書』芙蓉書房出版 一九九六年)、六〇頁。
- (53) 前掲、「勝海舟日記」、三七頁。
- (54) 榎本隆充編『榎本武揚未公開書簡集』新人物往来社 二〇〇三年
二四頁。
- (55) 前掲、「東征日記」、六六頁。
- (56) 佐々木克・藤井讓治・三澤純・谷川穰編『岩倉具視関係史料』上 思
文閣出版 二〇一二年 二〇三頁。
- (57) 前掲、『岩倉具視関係史料』上、二〇三頁。
- (58) 前掲、『岩倉具視関係史料』上、二〇四頁。
- (59) 前掲、『岩倉具視関係史料』上、二〇五頁。
- (60) 前掲、『岩倉具視関係史料』上、二〇五頁。
- (61) 前掲、『岩倉具視関係史料』上、二〇五頁。
- (62) 前掲、『岩倉具視関係史料』上、二〇六頁。
- (63) 前掲、『岩倉具視関係史料』上、二〇六頁。
- (64) 大山柏『戊辰役戦史』時事通信社 一九八八年補訂版 五八五頁。
- (65) 北郷久信、本田彌右衛門、橋口源右衛門「軍艦乾行丸」(大塚武松編『薩
摩出軍戦状』第一卷 東京大学出版会 一九三三年)、三四二頁。
- (66) 前掲、『戊辰役戦史』、六五〇―六五二頁。
- (67) 前掲、『戊辰役戦史』、六五〇―六五二頁。
- (68) 稲川明雄「寺泊海戦―越後における唯一の海戦」(『戊辰戦争全史』上
新人物往来社 一九九八年)、二〇五―二〇六頁。
- (69) 前掲、「寺泊海戦―越後における唯一の海戦」、二〇五―二〇六頁。
- (70) 前掲、「軍艦乾行丸」、三四五頁。
- (71) 前掲、『戊辰役戦史』、六五〇―六五二頁。
- (72) 前掲、「寺泊海戦―越後における唯一の海戦」、二〇五―二〇六頁。
- (73) 前掲、『戊辰役戦史』、六五〇―六五二頁。
- (74) 前掲、「軍艦乾行丸」、三四五頁。
- (75) 前掲、「寺泊海戦―越後における唯一の海戦」、二〇五―二〇六頁。
- (76) 前掲、「寺泊海戦―越後における唯一の海戦」、二〇五―二〇六頁。
- (77) 前掲、『戊辰役戦史』、六五〇―六五二頁。
- (78) 前掲、「軍艦乾行丸」、三四六頁。
- (79) 前掲、『戊辰役戦史』、六五〇―六五二頁。
- (80) 前掲、『戊辰役戦史』、八五〇―八五二頁。
- (81) 前掲、『榎本武揚未公開書簡集』、二七頁。
- (82) 「林董回顧録」(由井正臣校注『後は昔の記他―林董回顧録』東洋文庫
一七四 平凡社 一九七〇年)、二三頁。
- (83) 前掲、「林董回顧録」、二四頁。
- (84) 前掲、『岩倉具視関係史料』下、四二六頁。
- (85) 前掲、「林董回顧録」、二五、二七頁。
- (86) 前掲、「林董回顧録」、二五、二七頁。
- (87) 菊池勇夫『五稜郭の戦い 蝦夷地の終焉』吉川弘文館 二〇一五年

一〇〇頁。

- (88) 島田魁「島田魁日記」(菊池明・伊東成郎編『新選組大全』株式会社 KADOKAWA 二〇一四年)、二三頁。
- (89) 松本良順「噬臍録」(前掲、『新選組大全』)、九六一頁。
- (90) プラント、原潔・永岡敦訳『ドイツ公使の見た明治維新』新人物往來社 一九八七年 一六二頁。
- (91) 前掲、「島田魁日記」、二三頁。
- (92) 『青森県史』資料編近世6 幕末・維新期の北奥 二〇一五年 一六〇頁。
- (93) 前掲、「青森県史」資料編近世6、一六一頁。
- (94) 中島登「中島登覚書」(前掲、『新選組大全』)、六二頁。
- (95) 北海道編・発行『新北海道史』第三卷通説二 一九七一年 四四頁。
- (96) 前掲、「島田魁日記」、二四頁。
- (97) 前掲、「青森県史」資料編近世6、五四二頁。
- (98) 前掲、「青森県史」資料編近世6、五四二頁。
- (99) 前掲、「青森県史」資料編近世6、五四三頁。
- (100) 前掲、「青森県史」資料編近世6、五四三頁。
- (101) 前掲、「青森県史」資料編近世6、一六五頁。
- (102) 前掲、「島田魁日記」、二五頁。
- (103) 前掲、「青森県史」資料編近世6、五四四頁。
- (104) 前掲、「青森県史」資料編近世6、五四五頁。
- (105) 樋口雄彦「箱館戦争と榎本武揚」吉川弘文館 二〇一二年 一三頁。
- (106) 前掲、「新北海道史」第三卷通説二、五七頁。
- (107) 前掲、「榎本武揚未公開書簡集」、二八頁。
- (108) 前掲、「榎本武揚未公開書簡集」、二八頁。
- (109) 多田好問『岩倉公實記』中巻 原書房 一九六八年 六九六―七〇四頁。
- (110) 中村治子『臙屋日記』に見た明治維新 もう一つの箱館戦争』北方新社 一九九八年 一六〇頁。
- (111) 前掲、『臙屋日記』に見た明治維新 もう一つの箱館戦争、一六四頁。
- (112) コラッシュ「箱館戦争生き残りの記」(M・ド・モージュ他、市川慎一・榎原直文編訳『フランス人の幕末維新』有隣新書 一九九六年) 七二頁。
- (113) 立川主税「立川主税戦争日記」(前掲、『新選組大全』)、八三頁。桑名藩士で新選組に所属した石井勇次郎も「鉄艦モ亦其備アリ、且他艦ヨリ頻ニ発砲ス」(石井勇次郎「戊辰戦争見聞略記」(前掲、『新選組大全』)、一八二頁にもほぼ同様の記述が見られる。
- (114) 前掲、「中島登覚書」、六四頁。
- (115) 前掲、『臙屋日記』に見た明治維新 もう一つの箱館戦争、一六五頁。
- (116) 前掲、「島田魁日記」、二六頁。
- (117) 前掲、『臙屋日記』に見た明治維新 もう一つの箱館戦争、一七〇頁。
- (118) 前掲、「戊辰戦争見聞略記」、一八二頁。
- (119) 前掲、『臙屋日記』に見た明治維新 もう一つの箱館戦争、一七三頁。
- (120) 前掲、『臙屋日記』に見た明治維新 もう一つの箱館戦争、一七五頁。
- (121) 前掲、「島田魁日記」、二八頁。
- (122) 前掲、「島田魁日記」、三〇頁。
- (123) 前掲、「中島登覚書」、六六頁。
- (124) 前掲、「島田魁日記」、三四頁。
- (つかごし・としゆき 法政大学第二中高等学校非常勤講師)

榎本艦隊リスト（脱走前後）

船名	項目 建造年	艦種	トン数 (排水量)	乗組員 (人)	機関馬力	備砲 (門)	備考	主な艦長
開陽	1866	木造スクリー ーフリゲート	2590	429	最大1200	34	箱館戦争で座礁・ 沈没。	榎本武揚→ 沢太郎左衛門→ 荒井箴之輔
回天	1855	木造外車コ ルベット	1678	211	400	13	箱館戦争で焼失。	柴誠一→甲賀源吾 →根津勢吉
蟠龍	1856	木造スクリー ーヨット	370	94	128 (幕府側の記 録では、60)	4	箱館戦争で焼失。	浜口卓右衛門→ 根津勢吉→ 松岡磐吉
咸臨	1857	木造スクリー ーコルベット	625	85	100	12	新政府軍に拿捕。	小林文次郎 (副長春山弁蔵)
千代田形	1866	木造スクリー ー砲艦	138	50	60	3	新政府軍に拿捕。	森木弘策(仁作) (副長市川慎太郎)
高雄	1867	トップスル・ スクナー・ スクリーユ蒸 気船	350	70 (宮古湾海戦時、 切り込み隊抜く)	74 (日本側文献 では250)	6	1868年、秋田藩が 購入したものを榎 本艦隊が奪うも焼 失。	古川節蔵
神速	1861	木造スクリー ー	250	35	45から90	2	箱館戦争で座礁・ 沈没。	西川真蔵→ 飯田俊平
美賀保 (美香保)	1865	パーク型木造 船	800	614 (品川沖出発時)			箱館戦争で座礁・ 沈没。	宮永扇三
第二長崎	1862	鉄製蒸気ス クナー・ス クリーユ	341		120		箱館戦争で座礁・ 沈没。	
長鯨丸	1864	鉄製蒸気外車	1462 (日本側の記 録では996)		300		榎本艦隊輸送船。 新政府軍に拿捕。	相浦紀道→ 渋沢誠一郎
鳳凰丸 (豊島形)	1854 (1866改 造)	パーク型木造 船	600				榎本艦隊輸送船。 新政府軍に拿捕。	梶尾勇之輔 副長中島三郎助 同佐々倉桐太郎
大江丸	1861	木造蒸気・ス クリーユ・ パーク型	160	40	120	1	榎本艦隊輸送船。 戦費調達のためフ ランス商人ファー ブルに一万ドルで 売却。	根津勢吉
千秋丸 (回春丸)	1850	パーク型木造 船	263				仙台藩より奪取。 榎本艦隊輸送船。 戦費調達のためフ ランス商人ファー ブルに売却。	浜口卓右衛門→ 安富才輔
行速丸	1860	木造外輪船	250		250		原名ファイセン。慶 応2年購入。明治 3年静岡藩から新 政府へ渡る。明治 4年イギリス人に 売却。	天野新太郎
富士山	1864	木造スクリー ースloop	1000	231	360	12	江戸城無血開城後 に朝廷に渡した。	望月大掾→柴誠一
観光	1850	木造外車コ ルベット	400	97	150	15	江戸城無血開城後 に朝廷に渡した。	
朝陽	1857	木造スクリー ーコルベット	625	108	100	12	江戸城無血開城後 に朝廷に渡した。	
翔鶴丸	1857	木製蒸気外車	350		350	4	江戸城無血開城後 に朝廷に渡した。	肥田浜五郎

なお、戦艦として使用するときには「丸」は付けない。

上の表は元綱数道『幕末の蒸気船物語』をもとに作成し、勝海舟『海軍歴史』、立川主税「立川主税戦争日記」で補った。

新政府軍艦隊

船名	原名	建造国 建造年	艦種	排水量 (トン)	機関馬力 (IHP)	備砲	備考
甲鉄	ストーンウォール・ ジャックソン (Stonewall Jackson)	フランス、 1864	木造ラム付装甲艦、 スクリュー	1358	1200	3	1888年廃艦、1867年 幕府購入
春日	キャンズー (Chiangtzu)	イギリス、 1863	木造、外車通報艦	1015	300(NHP)	14	1894年廃艦、1867年 薩摩藩購入
第一丁卯	ヒンダ (Hinda)	イギリス、 1867	木造、スクリュー砲 艦	236	60	2	1875年座礁沈没、1867 年長州藩購入
朝陽	エド (Edo)	オランダ、 1867	木造、スクリューコ ルヴェット	625	100(NHP)	12	箱館戦争で沈没、1858 年幕府購入
陽春	カガノカミ (Kaga-no-kami)	アメリカ、 1861	木造、スクリュー武 装商船	530	280	6	1870年売却、1868年 秋田藩購入
延年	カレドニア (Caledonia)	香港、 1868	木造、スクリュー砲 艦	700	100(NHP)	8	1871年売却、1868年 佐賀藩購入
乾行	ビーグル (HMS Beagle4代目 ¹⁾)	イギリス、 1854か	木造、バーク型砲艦	522	150(NHP)	9	1889年売却、1864年 薩摩藩購入
大鵬	コロンビア (Columbia)	アメリカ、 1855	木造、蒸気外車	777	280(NHP)		1862年福岡藩購入
翔鳳丸	ルーチェス (Luces)	イギリス、 1863	鉄、蒸気内車	461		4	1864年薩摩藩購入
平運丸	スコットランド (Scotland)	イギリス	鉄、蒸気内車 (ブリッグ型)	750	150(NHP)		1864年薩摩藩購入
摂津丸	コヤホッグ (Koyahog)	アメリカ、 1854	三橋シッピング 砲艦	920	300(NHP)	8	1869年広島藩に貸与
飛龍丸	プロミース (Promise)	アメリカ	木造蒸気内車	590	90(NHP)		小倉藩購入
戊辰丸	ヒリピノ (Filipino)	イギリス、 1866	木製螺旋汽船	450	120	2	1868年徳島藩購入
豊安丸	ジャパン (Japan)	イギリス	鉄製蒸気外車	473	126(NHP)		広島藩購入
翔鶴丸	ヤンツェー (Yangtse、揚子)	アメリカ	木製蒸気外車	350	350(NHP)		幕府購入
乙女丸	オーサカ (Osaka)	アメリカ	木製バルク	386			土佐藩購入

1) Beagleは9代まで確認される。進化論を唱えたダーウィン(Charles Robert Darwin)の乗船したBeagleは1820年の建造の3代目のものである。

上記表は元網数道『幕末の蒸気船』成山堂書店 2004年 12頁、138頁を参照して作成。